

お薬のしおり

No.171 (H28.5)

東京医科大学病院 薬剤部

緩和ケアと医療用麻薬について

みなさんは「緩和ケア」や「医療用麻薬」という言葉を耳にしたことはありませんか？ 「緩和ケア」とは、がんによる心と体の苦痛をやわらげ、患者さんご家族にとって、自分らしい生活を送ることができるようにするケアのことを言います。がんの治療中から、どの施設でも受けることができます。その中でも、「痛み」はがん患者さんの70%にみられ、その90%以上は、がんの痛みの治療により抑えることができるということが言われています。そこで今回は、緩和ケアと痛みのコントロールで使用される医療用麻薬についてお話しします。

◆がんによる痛みの種類◆

- ①がん自体（腫瘍の浸潤や増大、転移など）が直接の原因となる痛み
 - ②がん治療に伴って生じる痛み（手術後や化学療法など）
 - ③がんに関連した痛み（長期間寝たきりの状態などで起こる腰痛、褥瘡など）
 - ④がんに関連しない疾患による痛み（変形性脊椎症、片頭痛など）
- があります。また、痛みには2つのタイプ（①持続痛：24時間のうち12時間以上経験される平均的な痛み、②突出痛：持続痛の有無や程度、鎮痛薬使用の有無に関わらず発生する一過性の痛み、または痛みの増強）があり、痛みの程度や性質に合わせて適切な治療を行います。

◆がんによる痛みに用いられるお薬◆

がんの痛みのうち弱い痛みに対しては、アセトアミノフェンや炎症を抑える作用のある非ステロイド性消炎鎮痛薬が使用されます。それでも効果がない場合、モルヒネなどの「医療用麻薬」が用いられます。体の中には医療用麻薬と同じ働きをする「β - エンドルフィン」と呼ばれる物質があり、痛みを脳に伝える神経の活動を抑制して、強力な鎮痛作用を示します。医療用麻薬も同様のメカニズムで鎮痛作用を示します。



「麻薬」と聞くと、不正薬物と誤解したり怖いイメージを持たれたりすることもあります。医療用麻薬は有効性・安全性が確認され、国が承認したお薬です。また、がんの痛みのような強い痛みがある人が、医師の指導のもとで医療用麻薬を使用すれば中毒にならないということが、科学的に証明されています。痛みを抑えるための医療用麻薬の量には個人差があり、飲む量が増えたとしても、それによって中毒を起こしたりすることはありません。

医療用麻薬には、下記のような薬剤があり、内服薬や貼付剤、注射薬など様々な剤形があります。

- モルヒネ（商品名：MS コンチン錠、ピーガード錠、オプソ内服液、アンパック坐剤）
- フェンタニル（商品名：デュロテップMTパッチ、フェントステープ）
- オキシコドン（商品名：オキシコンチン錠、オキノーム散）

医療用麻薬はお薬の効果が出る時間の違いにより、持続型（お薬の効果が長時間持続する）とレスキュー（お薬自体の効果が出る時間が速く、持続する時間は短い）の2つのタイプがあります。個々の患者さんの痛みの程度や持続時間などを考慮し、医師が適切な医療用麻薬を選択し量を決定します。

医療用麻薬の主な副作用としては、便秘や吐き気が挙げられます。便秘に対しては緩下剤を用いて排便コントロールを行います。また、吐き気は医療用麻薬を飲み始めて2週間ほどで消失することが多いため、使用開始時に吐き気止めを服用することもあります。

<オレンジバールンプロジェクト>

2007年4月にがん対策基本法が施行され、がん患者の療養生活の質の維持と向上を目的として、「緩和ケア」を推進していくことが定められました。

日本緩和医療学会では、緩和ケアを国民のみなさんへ広く正しく知っていただくために、「オレンジバールンプロジェクト」を企画しています。

また、患者さん自身にご使用いただける、痛みを伝えるための様々なツールも開発されていますので是非ご利用ください。

・つたえるアプリ（痛みのつらさを数字で表現、記録するツール）、がんの痛み伝達シート（痛み、便秘、吐き気、眠気などを記入する形式）

（参考：シオノギ製薬 <http://www.shionogi.co.jp/tsurasa/communicate/merit/application/>
<http://www.shionogi.co.jp/tsurasa/communicate/merit/checksheet/>）

お薬のことでご不明な点やご不安な点がある場合には、
医師又は薬剤師までご相談ください。

